

芭蕉、蕪村、子規の俳句と能
Haiku and Noh of Basho, Buson, Shiki
Basho's Noh Haiku (Hokku)

[その一] 芭蕉の能句(発句)

木佐貫 洋

KISANUKI Hiroshi

As far as I have examined, Basho has 27 haiku about noh, Buson has 56 noh haiku and Shiki 72. They all made haiku and hokku composed of the classic chanting of noh music in parodies. There are some common stances in their writings, but there are also differences. This appears to depend on the different life led by each. Here I examine their lives through the ideal way of the acceptance of noh (the chanting of noh music). Also, the point of this paper is to improve how deeply Basho, Buson, and Shiki are concerned with noh. This paper argues about Basho's noh haiku.

はじめに

八島正治は、三島由紀夫の『近代能楽集』を「能楽の自由な時間と空間を借りて自らの美学や形而上学を自在に表現しているのである」(注1)と評している。「能楽の自由な時間と空間」という八島の表現は能の特質をよく捉えている。

ドナルド・キーンは「読み物として能を考えて見ると、あらゆる演劇の中で一番出来た時代の束縛受けないのは能ではないかと思うほどである。」(注2)と述べ、さらに次のように能について述べている。

能には仏教的な味が濃くて、非常に難解な文章が多いが、筋からみたり登場人物

の悩みからみたりすると、無理な所が案外少なくて、浄瑠璃や歌舞伎と比べると、問題にならないほど近代的である。言いかえると、『忠臣蔵』は飽くまで徳川時代の産物で、「近代忠臣蔵」ということは不可能であろうが、『熊野』は室町時代に書かれたが当時の政治情勢や思想と全く関係なく、時代を越えたテーマを扱っている。

(注3)

ドナルド・キーンは、「筋からみたり登場人物の悩みから見たりすると、無理な所が案外少なくて」という能の特質を喝破するとともに、その普遍性について述べている。

八島正治、キーンの両氏の論は、能の持つ伝統的で形式を重視すると言う一般的なイメージを払拭させる。能そのものは極めて柔軟で融通のきく、フレキシブルな精神を内に秘めた総合演劇なのである。そこに俳句とつながる共通のものが存在するのである。本稿では、芭蕉、蕪村、子規の能に関連する俳句(発句)を手掛かりに、能という文化が時代を超えて、人々に精神的影響を与え、また新しい何かを創造する礎になってきたことを論証したい。本稿はその[一]として芭蕉の能句について述べる。

【一】 芭蕉の能句

【 1 】

あら何ともなや昨日は過ぎて河豚汁

芭蕉

「あら何ともや」は謡曲の「あら何ともなや候」の文句取りもじりの方法である。河豚を食べたが、毒に当たらず昨日は過ぎてしまったという意の句である。饗庭孝男はその著『芭蕉』の中で、この句について次のように評している。

この笑いは謡曲の言葉を生かして、死の危険のある河豚汁と対比させたところの面白さである。古典文学、謡曲を入れながら言葉のおかしさを介在させ、河豚汁をすする人の心の機微をつくような詠み方する。貞門とのちがいは、連歌への

向上を意識せず、しかも、生活感覚を生かしながら異なった次元にある言葉をつき合せて俳諧のもつ滑稽と通俗性をもとうとしたところにある。 (注4)

饗庭は掲句によって、貞門との違いを述べている訳である。芭蕉の掲句から「生活感覚を生かしながら異なった次元にある言葉をつき合わせて」なる句の成り立ちに注目している。異なった次元にある言葉とは、まさにひとつの異文化の領域にある言葉同士である。芭蕉はその異文化を融合し、新しい領域の句を詠じようとしたとも言える。すでに武士階級の式楽と化した高級な文化に、滑稽と通俗性という庶民文化を加え、誰もが親しみ味わうことのできる句の開発をしたと言える。饗庭は古典を引用し句を作る芭蕉について

古典と現実生活の落差の面白さを示すところに「寓言」(そらごと)の意味があったといえよう。もじりの方法は今栄蔵の解説(前掲『芭蕉句集』)も指摘するように、謡曲が圧倒的に多かったという。それは、本歌本説の文句を逐語的にもじるものと、その趣向をもじる「心のもじり」の二つに分かれるという。芭蕉の場合もとくに謡曲が対象になる度合いが多かったのである。 (注5)

と説明している。古歌や謡曲は一定程度の古典の教養がなければ理解できない。同様に、もじりや言葉あそびもそうである。芭蕉初期の頃は貞門派に属し連歌や連句を盛んに作っていた訳で、教養集団の中での句の味わいであり、笑いであった。それに通俗性を持たすようにしたのが芭蕉であったが、後記の資料「芭蕉の能句」に掲出している句の中の多くは、その通俗性だけでなく「心のもじり」の部分重視した句が圧倒的に多いように思われる。

[2]

- A おもしろうてやがて悲しき鶺鴒舟哉
- B むざんやな甲の下のきりぎりす

Aの句は謡曲『鵜飼』の主旨をとりいれている。能『鵜飼』を知らなければこの句の意を汲み尽くすことは出来ない。

その歌の一つ「鵜舟の簀影消えて、闇路に帰るこの身の、名残り惜しさをいかにせん」をフィルターとする必要がある。火の明かりと闇の交替は見るものの心に寂しさの翳りをもたらそう。それが芭蕉のいう「やがて悲しき」にほかならない。たのしさとかなしさである。(注6)

と饗庭は評している。能『鵜飼』全体のイメージがあって初めてこの句が理解出来るのである。殺生禁止の場所で掟を破り、殺された鵜飼の霊が救われていく様子を知らなくては、鵜飼のかなしさではなく、鵜の哀れさのイメージが強く印象的に残ってしまう。鵜が鮎を獲るはなやかな宴は、その一方で、鵜飼のかなしさを表現していることを知ることは絶対に必要なことである。しかし、ここではそれ以上に、救われない人間の深い哀しみがクローズアップされていることを見落としてはならない。

ブライス (R.H. Blyth) は「ZEN」という論文の中で次のようにこの句を解釈している。

おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな

Omoshiroute yagate kanashiki ubune kana

The cormorant fishing-boat

How exciting! But after a time

I felt saddened.

Basho does not tell us what made him sad. Was it pity for the fish, for the cormorants forced to regurgitate what they had swallowed, for the men engaged in such a labour of preying on the greediness of the birds, or for humanity in its endless desire and craving? The simplest and best answer is that Basho himself did not know. It was "tears, idle tears," and that is all.

(注7)

ブライスの解釈はすこし違っている。鵜のかなしみと鵜飼のかなしみは本質的に異質

であること。鶉のかなしみは本能を強制的に中断させられるかなしみであるとし、また、それを強制する人間の業の哀しみを鶉飼から感じ取っている。しかし、芭蕉はその事については語らない。語りようがないのである。彼等の哀しみは価値のない哀しみであり、すべての事はそのようである。という感慨をブライスはこの句から得て解釈している。このような感慨は禅的なものである。確かに、ブライスのこの解釈は饗庭の解釈とはやや異なっているが、饗庭の感慨とは通底している。価値のない哀しみは無常観に通じており、救われない人間の哀しみと重なる感慨でもある。そのような人間の気持を表すには能の表現方法が適切であった。ただ、ブライスは「ZEN(禅)」との関わりは考えたが、能との関係には考え及んではいなかったと思われる。

Bの句も、人間のはかなさ、せつなさを詠じたものである。「むざんなやな」は謡曲『実盛』の中にある「樋口参りただ一目見て 涙をはらはらと流ひて あな無慚やな斎藤別当にて候けるぞや」(注8)からの引用である。「夏草や兵どもが夢の跡」の句と通底するものがある。実盛は白髪の老人であった。その白髪を染めてまでして戦った実盛の霊が救われないでいる。戦いの雄々しさとむざんさの対比。そしていいようのない寂寥感が詠みこまれている。戦とは全く関係なく鳴きりぎりす(こおろぎ)の音は、人間の深い無常観を表している。芭蕉はこの二つの句からも、能が得意とする表現の型、「人間の情念の世界」を描き出すのに成功している。

[3]

こうして旅に出る芭蕉は一木一草にも美と出会い心深くふるえるのですが、それらの自然の美しきものもまた無常を具現しているとみられるのであり、したがってそこに客観的な美の世界を見、美を感じるよりは、主観的な生のあわれやわびを見ることに落ちつくのです。芭蕉はそのような仕方で無常な生の現実と芸術との統一の極致を求めたのでした。(注9)

と内田芳明はその著『風景の発見』で述べている。「主観的な生のあわれやわびを見る」という芭蕉の表現方法は、能の表現方法と同心円状的に一致していると思われる。「無常な生の現実と芸術との統一の極致を求めた」という芭蕉の生き方は

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

という辞世の句に収斂されている。森本哲郎は「枯野はけっして美の園ではない。夢の国でもあり得ない。枯野が黙示しているのは、宗教的な悟りの世界なのだ」(注10)とこの句を評している。芭蕉は求道者として彼岸の世界を目指して人生を歩んできたわけである。滑稽的な表現を時にはしながら詠んだ芭蕉の能句の多くは森本の論に包括されてしまう。いや、それだからこそ芭蕉の能句は彼の実感、すなわち人生観とともにあったと思われる。

内田芳明は萩原恭男の『奥の細道』の評としての

《松島の明に対して象潟は暗、太平洋が明るいイメージで、日本海側は暗いという型にはまった印象で〔表日本と裏日本という〕二つの柱をきめつけてしまっているのはなぜか》と云い、《芭蕉はその現実にその地を巡歴しているのに、そういう固定観念にとらわれていて、自分の実感はどうなる》 (注11)

という論を取り上げながら一方で

荒海や佐渡によこたふ天河

の説明として、加藤楸邨のこの句の評「幻の景」という評価を是定しつつ

だとするとこの句は、思い入れによって一段と深さを増す秀逸の句だと私には思われますが、しかしそれだけで他方ではそれが自然風景の発見と驚嘆の作句からは遠ざかる主観性の強い句だ。 (注12)

と説明を加えている。そして

閑さや岩にしみ入る蝉の声

石山の石より白し秋の風
古池や蛙飛びこむ水の音

の評として次のように述べている。

単なるかなしみやさびしさをつきぬけた一つの境地を表した作品もありますが、これらもやはり、このような、あはれ、わび、静寂、枯淡、孤高といった深い調べの作品でありまして、無常観を持って旅ゆく芭蕉の風狂の精神を深く表現したという意味で、まことにすぐれた芸術的結晶だったと言うべきでしょう。（注13）

内田芳明は三つの掲句を「単なる、かなしみやさびしさをつきぬけた一つの境地を表した作品」と高い評価を与えているが、前掲句A・Bともに、同じような境地に至っている能句であるとも言える。総じて芭蕉の能句は佳句と言ってよいだろう。それはくりかえすが、能の持つ特性（人間の情念や無常を表すのに最適）を十分生かしているからである。

[4]

能とは、その上演の瞬間瞬間にしか生起しない虚構の体験として、まさしく演劇の精髓を生きているものではなからうか。（注14）

と渡辺守章は能の虚構性を述べている。山下一海は『おくのほそ道』について「事実ばかりではなかった。事実にとらわれていない自由な創りもの、つまり、文芸であった」（注15）と述べている。さらに山下一海は次のように芭蕉の文芸について述べる。

自分の人生から文芸を生もうとしたのではなく、文芸から自分の人生を生み出そうとしていた。（注16）

事実の俗臭から離れていることによって、それは事実としての時間にはしばられていない。（注17）

芭蕉の能句は、その出典をそれぞれの謡曲に依拠しながら、A, Bの句のように「心の形」を伝えるものとなっている。日常の生活は弟子たちの厚意によって成り立っており、十分とはいかなくても糊口に困る事はなかった。それ故に、己の「心の形」にあくまでも拘泥すればよかった。そこに、芭蕉は己の文芸のスタンスを確立することができた。資料の能句を一瞥しても、その文芸性、虚構性を十分見て取ることができる。つまり、芭蕉の能句においても、人間的眞実への探求精神を強く感じさせられる。また、この精神は能的精神と通底するものがある。

芭蕉の能句はあくまでも実生活的感覚を重視したものではなく、感性的世界であり、劇的構成(虚構)の世界である。能も然りである。芭蕉が能を出典として句を多く詠んだのは、単に内容の広がり面白さを模索したものではなかった。あくまでも己の心を表現するのに能的世界がフィットしたからである。

[注]

- 1 八島正治の論文『近代能楽集』、『国文学解釈と鑑賞』至文堂 2000年11月号 123頁
- 2 1と同 124頁
- 3 1と同 124頁
- 4 『芭蕉』 饗庭孝男 集英社新書 2001年5月 37頁
- 5 4と同
- 6 4と同 88頁
- 7 『ESSENTIALLY ORIENTAL: R.H. Blyth Selection』 Edited Kuniyoshi Munakata and Michael Guest THE HOKUSEIDO PRESS TOKYO 223頁
- 8 『謡曲百番』 岩波書店の新古典文学大系 1998年3月 620頁
- 9 『風景の発見』 内田芳明 朝日選書(朝日新聞社)2001年5月 23頁
- 10 『生き方の研究』 森本哲郎 新潮社 1998年8月 56頁
- 11 『おくのほそ道』解説 岩波文庫 1979年 258頁
- 12 9と同 26頁

13 9と同 27頁

14 「現代における能」 渡辺守章 『國文学』 1978年 6月号

15 「『おくのほそ道』 文芸と人生 」 山下一海 『国文学 解釈と鑑賞』
至文堂 1993年5月号 75頁

16 15と同 77頁

17 15と同 77頁

【付記】 本稿は、本年三月、沼津において開催された本学会での発表原稿の第1章を、加筆、訂正、削除等をして纏めたものである。

〔資料〕

芭蕉の能句

(『芭蕉句集』日本古典文学大系・岩波書店・1972年版等を参考にした。)

芋洗ふ女西行ならば哥よまむ

謡曲「江口」 江口の遊女に西行が歌を詠んだことにちなむ
西行 「世の中をいとふまでのこそ難からめ飯のやどりを惜しむ君かな」
江口の遊女「世をいとふ人とし聞けば飯の宿に心とむなと思ふばかり」

春なれや名もなき山の薄霞

謡曲「高砂」 枝も鳴らさぬ...
謡曲「弓八幡」 四つの海...
謡曲「誓願寺」 げに安楽の...
謡曲「隅田川」 四鳥の別れ
謡曲「佐保山」 二月の初神なれや

姥桜さくや老後の思ひ出

謡曲「実盛」 「深山木のその梢とは見えざりし、桜は花に現はれたる、古い木をそれとご覧よ」を発想の契機

京は九万九千くんじゅの花見哉

謡曲「誓願寺」「百万」「実盛」 「九千くんじゅ」は謡曲の中では、寺社の参詣人の多いこと

五月雨に御物遠や月の顔

謡曲「松風」「定家」 「月の顔」が出ている

杜若にたりやにたり水の影

謡曲「杜若」の文句取り

やまなかや菊はたおらじ湯のにほひ	謡曲「菊慈童」
たふとさや雪ふらぬ日も蓑とかさ	謡曲「卒塔婆小町」 うしろ負へるは袋には...やぶれ蓑
糸桜こやかへるさの足もつれ	「こやかへるさの」は謡曲によくある口調
あら何ともなやききのふは過てふくと汁	「あら何ともなや」 謡曲の慣用句 謡曲「海土」「船弁慶」
あやめ生り軒の鰯のされこうべ	謡曲「通小町」
実や月間口千金の通り小町	謡曲「田村」に「一攫千金」
盃や山路の菊と是を干す	謡曲「菊慈童」や「安宅」
青ざしや草餅の穂に出つらん	謡曲では「穂に出でそめし言の葉の」とよく使う
秋をへて蝶もなめるや菊の露	謡曲「菊慈童」
観音のいらかみやりつ花の雲	謡曲「西行桜」
三井寺の門たゝかばやけふの月	謡曲「融」...げに > 月の 謡曲「三井寺」鳥八...僧八敲ク月下ノ門...
田一枚植て立去る柳かな	謡曲「遊行柳」を連想
一家に遊女もねたり萩と月	謡曲「山姥」
むざんやな甲の下のきりぎりす	謡曲「実盛」 「あなむざんなや斎藤別当実盛にて候ひけるぞや」の文句取り
はなかげうたひに似たるたび寝かな	謡曲「忠度」 この花の陰ほどのお宿とせば...
おもしろうてやがて悲しき鵜舟哉	謡曲「鵜飼」 「鵜舟の篝火消えて、闇路にに帰るこの身の名残惜しさをいかにせん」とある 「跡の世も忘れ果てて面白や」 「鵜舟に灯す篝火の消えて闇こそ悲しけれ」
明月や海にむかへば七小町	謡曲 「草子洗小町」「閑寺小町」「清水小町」「通小町」 「鸚鵡小町」「高安小町」「卒塔婆小町」をさす

(前書に、本間主馬が宅に骸骨どもの笛鼓をかまえて能する処を画きて.....)

稲づまやかほのところが薄の穂
本間主馬は大津の能太夫のこと。小野小町の骸骨が詠んだという「秋風の吹くにつけてもあなめあなめをのとはいはじ薄生ひけり」の歌をふまえている。